



「湯の山温泉 歴史こぼなしの道」散策

菰野町

湯の山温泉街界隈

御在所山の麓に湧き出る湯の山温泉の歴史は1300年前にまで遡るといわれます。長い歴史の間には、多くの文化人や名士たちも来遊し、紀行文や小説、短歌など、優れた文学作品が誕生しました。

現在、湯の山温泉街をそぞろ歩けば、ところどころで文学碑と傍らに設置された自然石の石盤を見かけるでしょう。石盤は菰野町が設置したもので、これらをたどる「湯の山温泉 歴史こぼなしの道」も設定されています。

今回は「湯の山温泉 歴史こぼなしの道」を軸として数か所をご紹介します。時には温泉街に秘められた物語に耳を傾けてみてはいかがでしょうか。

取材・文：中村真由美



御在所ロープウェイ「湯の山温泉」駅



「鈴木小舟の歌碑」



「阪正臣の歌碑」

宮廷歌人、鈴木小舟

(1857~1923)

今回の散策は、御在所ロープウェイ「湯の山温泉」駅の駐車場(有料)に車を停めてスタートします。なお、4月1日から11月30日までの期間は、近鉄「湯の山温泉」駅から三重交通バスが運行しています。公共交通機関を利用の場合は、事前に運行状況や時刻表などを確認する事をおすすめします。

御在所ロープウェイ「湯の山温泉」駅

を後にして、最初に向かうのは「鈴木小舟の歌碑」です。ロープウェイ乗り場前から続く細い階段を足元に気を付けながら下りていくと、三滝川に架かる涙橋が見えてきました。歌碑は橋の近くに建ち、「世の中の春にはあそびあきけりいさ鷺と山こもりせむ」と流麗な文字が刻まれています。この歌は、家庭の不幸や自身の病が続いた小舟が、湯の山で一人静かに過ごしていたころの作品。明治29(1896)年に伊勢神宮を参拝された皇后の目に留まったことが縁で、

こかぢうごようしうしうしよおんとい、御歌道御用皇后宮職御雇に抜擢。つまり、宮廷歌人になったのです。

蒼滝橋と定五郎

今も郷土の誇りとして慕われる小舟の歌碑に別れを告げて涙橋を渡ります。西へ向けて歩くと、やがて旅館「寿亭」に到着。小説の神様と称された志賀直哉など、多くの文化人や名士たちが逗留したことでも知られる同旅館には、数々の見どころがありますが、見逃せないのが、玄関へと続く石段に嵌め込まれた



今回、お話を伺ったのは「菰野町図書館」郷土資料コーナーの学芸員・西山 祐実(ゆみ)さんと宇佐美 正文さんです。





令和6年に架け替えられた蒼滝橋

「**阪正臣の歌碑**」と、三滝川に架かる蒼滝橋です。

阪正臣(1855～1931)は、名古屋出身の宮廷歌人。歌碑には「こものやまいつこをみるもあかされとすぐれくるなはこれのにひむろ」と記されています。同歌は昭和5(1930)年に行われた、「鈴木小舟の歌碑」の除幕式に参列した阪正臣が、「寿亭」の別館「水雲閣」(国登録有形文化財)から見た景色を詠んだものといわれます。なお、新室とは新築の部屋のこと、前年に竣工したばかりの「水雲閣」を指しています。



ゆのやまのさだごろうばし



『ゆのやまのさだごろうばし』

一方、蒼滝橋は令和6年に架け替えられたばかりですが、以前の橋は、湯の

山では初のコンクリート橋として昭和8(1933)年に架けられました。小さな橋でしたが、そこには、ある人物の物語が秘められているのです。定五郎です。「寿亭」の風呂番として陰日向なくよく働いたため、旅館の主人や地域の人々からも愛され、大番頭は、従業員たちに「定五郎を見習え」というほどでした。そんな定五郎が病で亡くなった時に遺されたお金を元にして架けられたのが、以前の蒼滝橋なのです。令和

5年、菰野町商工会青年部が企画した「こもの昔ばなし絵



「大石公園」

湯の山を愛した人々

湯の山の人々が今も定五郎橋と呼び親しむ蒼滝橋から、次にめざすのは「大石公園」と「佐佐木信綱の歌碑」です。

だった大石橋が通行に危険だと知り、寄付を申し出たのです。

湯の山を愛した文化人や実業家は小菅剣之助のほかにも数多くいますが、鈴鹿市出身の歌人、佐佐木信綱(1872～1963)もその一人。三滝川沿いを歩いていると、誘い橋近くの川床に大きな歌碑が建っているのが見えますが、これが「佐佐木信綱の歌碑」。「白雲はそらにうかべり谷川の石みな石のおのづからなる」が刻まれています。同歌は信綱が昭和4(1929)年に来遊した際に詠んだ16首のうちの1首で、歌

碑は同 37(1962)年に建立されました。

「大石公園」や「佐佐木信綱の歌碑」を眺めた後は帰途に就きますが、その前に少し足を延ばして、俳聖・松尾芭蕉の句碑がたたずむ三獄寺に立ち寄るのもよいでしょう。同寺は、僧兵たちが集う山岳宗教の拠点だったことでも知られ、毎年10月には壮大な「僧兵祭り」が行われます。なお、芭蕉句碑に刻まれた句「文月や六日も常の夜には似す」は、「奥の細道」の旅の途中、直江津(新潟県)で詠まれました。また近くには、代々織田家や徳川家の御典医を務めた森家の別荘を利用したカフェ「鎮驚庵 山荘」もあります。

涙橋を経由して御在所ロープウェイ「湯の山温泉駅」へ戻るのが今回の散策のルートですが、温泉街の各旅館やホテルに投宿し、ゆっくり過ごしてみたいかがでしょう。

問 菰野町コミュニティ振興課

TEL 059-3391-1160



「佐佐木信綱の歌碑」



芭蕉句碑



カフェ「鎮驚庵 山荘」外観